

国立国語研究所学術情報リポジトリ

よく分かる日本語辞書とは

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 優 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002973

よく分かる日本語辞書とは

井上 優 (国立国語研究所)

mainoue@kokken.go.jp

1. はじめに

辞書は言語表現の意味や使い方を知るためのものである。そして、そのような辞書の存在意義が最も明確なのは、非母語話者が辞書を使う場合である。日本語の表現を理解・産出することは日々の生活の中でおこなわれることであるから、日本語の非母語話者にとって「よく分かる日本語辞書」があることは、「生活日本語」という観点から見ても重要なことである。

以下では、次の四つの観点から「よく分かる日本語辞書」について考える。

- (i) 何を記述の単位とするか。
- (ii) どのような表現を登録するか。
- (iii) 何を記述するか。
- (iv) どう記述するか。

2. 何を記述の単位とするか

辞書は言語表現の意味や使い方を記述するものである。そのことからすると、辞書の記述においては、意味や使い方を独立に記述する価値のあるまとまり（意味・使用上のまとまり）を記述の単位（見出しの単位）とするのが自然である（以下「見出し」は親見出し、子見出しの両方を指す）。また、非母語話者が辞書をひくのは、主に意味や使い方がわからない表現について調べるためであるから、「表現形式をあげて、その意味や使い方を説明する」という形が自然である。

しかし、辞書の説明は、「語」の基本形（代表形）を見出しとして立て、それに各種情報を付与するという形が基本になっている。そのため、次のようなことが起こりがちである。

第一に、よく用いられる表現が説明や用例の中に埋もれやすい。

たとえば、「ぶっちゃけた話」「いわんこっちゃない」は、辞書では次のような形でのっている。

- (1) ぶっちゃける (動カ下一) [「ぶちあける」の転]

「ぶちあける」のくだけた言い方。「一・けた話、実は…」

- (2) 言わないことではない

警告したとおりの悪い事態が起こったとき、警告を無視した相手の態度を非難して言う言葉。いわぬことじゃない。いわんこっちゃない。

((1)(2)は『大辞林第三版』, 下線井上)

(1)では、「ぶっちゃけた話」という表現は例としてあがっているだけであり、これが「はっきり言って」や「早い話(が)」と同じく前置き表現として用いられることは、例から暗示されるにとどまる。しかし、このことは明示的に説明したほうがよいことがらであり、そのためには、「ぶ

っっちゃけた話」が見出しとして立項されているほうがよい。

(2)では、「いわんこっちゃんない」が一つの表現として示されており、意味も説明されている。しかし、元の形を見出しにして「…のようにも言う」という説明を加える形になっているため、「言わないことではない」という元の形に戻せなければいけない。非母語話者の場合、変異形を元の形に戻すことは難しいことも多いので、むしろ「いわんこっちゃんない」という変異形を見出しにして「元の形は…である」という説明を加えるほうが親切である。

第二に、「語」を記述の単位とすることは、語の使用例を詳しく示すことが、語の意味区分の増加や意味の整理の困難さの増大につながりやすい。

たとえば、「条件をのむ」「息をのむ」は、句単位で「条件をしかたなく認める」「驚きや恐れのために一瞬息を止める(『明鏡国語辞典』)」という意味を表す。辞書ではそれらが「のむ」の意味としても記述されるため、その分「のむ」の意味区分が増え、「のむ」の意味の整理も難しくなる。

(3) の・む【飲む(▼呑む)】[他五]

(略)

⑦相手の要求などを受け入れる。妥協して認める。「敵の条件を一」「先方の言い分を一」「清濁併せ一」

⑧〔慣用句的に〕出そうになるものを抑える。こらえる。「あまりの美しさに息を一」「かたずを一・んで見守る」「涙を一・んで(=悔しさをこらえて)あきらめる」

(『明鏡国語辞典』)

「条件をのむ」「息をのむ」のような表現で用いられることは、動詞「のむ」の重要な情報である。しかし、「この語は『…』という句で用いられる」ということを示すために意味区分を増やすよりは、句の形を見出しとして示してその意味や使い方を説明するほうが、意味の説明が煩雑にならず、分類も簡潔にできる。

(4) のむ【飲む】

【<液体>をのむ】液体を口から入れる。「お茶を飲む」「水をガブガブ飲む」…

【<薬>をのむ】薬を口から入れる。(液体でない薬も「のむ」を用い、「食べる」は用いない。)
「粉薬を飲む」…

:

【条件(要求, 言い分)をのむ】条件(要求, 言い分)をしかたなく認める。

【息をのむ】驚きや恐れのために一瞬息を止める。「あまりの美しさに息をのむ。」

「はっと息をのむ。」

非母語話者は意味がわからない表現を辞書でひくのであるから、辞書における意味の分類はできるだけ形と結びついた分類(目に見える分類)であることが望ましい。句の形を見出しとすることには、そのような意味もある(姫野昌子監修(2004)『日本語表現活用辞典』(研究社)では、共起要素による分類がなされており、実質的に句が子見出しのようになっている)。

第三に、「語」を記述の単位とすると、特定のひき方をしないと表現が見つからない、あるいは、ひき方によって得られる情報が異なることが多くなる。

たとえば、先の「条件をのむ」「息をのむ」は、動詞「のむ」のコロケーションとして重要であると同時に、名詞「条件」「息」のコロケーションとしても重要でもある。しかし、「息をのむ」は、「息」の項目の子見出しとしてあげられることがあるが、「のむ」の項目では特定の意味区分のもとで例としてあげられているだけのことが多い。また、「条件をのむ」は、「のむ」の項目に例としてあげられていることはあるが、「条件」の項目では例としてもあがっていないことが多い。このような記述上のむらを避けるには、「条件をのむ」「息をのむ」を意味・使用上のまとまりとみなして見出しの単位とし、「条件」「息」「のむ」のいずれでひいても同じ情報が得られるようにするのがよい。

3. どのような表現を登録するか

辞書に登録されている表現にはむらがある。たとえば、「どうした? (=何が起こったか)」「いいです (承諾, 断り)」「よかった (=安心した)」「ほんともう」のような文相当の表現, 「どうってことない」「知らない (=知らない)」「やだ (=いやだ)」「ったくー (=まったくー)」のようなくだけた文体の表現は辞書にないことが多い。

しかし、非母語話者にとって、辞書は意味や使い方がわからない表現を調べるためのものであるから、「よく使われる表現なのに辞書にない」ということはできるだけないほうがよい。規範的とは言えない表現も、「規範的ではない」という説明付きで辞書にのっているほうが、非母語話者には親切である。

次のように、類似の意味を表す表現の一方があつて他方がないといったことも、できるだけないほうがよい。

(5) [辞書にあり/辞書になし]

- a. これという~/これといった~ (例: これという目的もなく, これといった目的もなく)
- b. あと+数量/残り+数量 (例: あと5分, 残り5分)
- c. やむをえず, しかたなしに/しかたなく
- d. ~ことに/~もので (例: おもしろいことに, おもしろいもので)

単なる「語の組み合わせ」のように見える表現も、辞書にないことが多い。たとえば、「もう」「すぐ」, 「みなさま」「~がた (方)」は辞書にあるが、「もうすぐ」「みなさまがた」は辞書にない。「もうすぐ」はアクセントからしても一語扱いしてよく、「みなさまがた」もこの形で用いられることがよくあるので、一つのまとまりとして辞書に登録されているのが便利である。また、「ついに」「~さえ」はどの辞書にもあるが、「ついには」「~でさえ」は辞書にない。「ついには」 (=最後には) は、「ついに+は」という形をしているが、意味的には「ついに (=とうとう)」と「は」の単純な合成とは言にくい。「でさえ」も「で+さえ」と分析できるが、「さえ」との意味の違いはこれだけからは予測しにくい。「ついには」「~でさえ」のように、ひとまとまりで一つの意味を表す表現は、独立の見出しとして立てられているのが望ましい。

4. 何を記述するか

辞書においては、表現の意味や使い方が過不足なく記述されていることが重要である。特に非母語話者向けの辞書においては、母語話者であれば用例を見ればわかることがらも、明示的に記述しておく必要がある。

まず、使用形式や言語的・文脈的な使用環境が限られる場合は、そのことを具体的に記述すべきである。たとえば、動詞「めがける」は、多くの場合「～(を)めがけて…する」の形で用いられるので、「～(を)めがけて」という形を見出しに立てるほうがよい。また、「到底」の後は(単に「否定」というよりは)「不可能」を表す表現が続く。このこともパターンとして示しておいたほうがよい。

(6) 到底できない。到底無理だ。到底かなわない。

(7) ?到底やらない。?到底関心がない。

表現の意味もできるだけ具体的に記述する必要がある。たとえば、「長々(と)」には「時間的に長く続けている」(『大辞林第三版』)ことを表す用法がある。しかし、より具体的に言えば、「長々(と)」が表すのは「主に訪問、話・文章などが意味もなく長い(帰ってほしいのに帰らない、話を終えてほしいのに終わらない)」ということである。

(8) 長々(と)おじゃまして申し訳ありませんでした。長々(と)いすわる。

長々(と)話す。長々(と)書く。長々(と)説教する。長々とした文章。

(9) ?先生が長々と説明してくださいました。

また、「良心的」は「良心に従って行動するさま。誠実なさま」(『大辞林第三版』)と説明されるが、日常生活では「サービス業において自分の利益よりも客へのサービスを優先して考える」ことについて用いられることが多い。

(10) 良心的な店。良心的な価格。良心的なサービス。良心的な対応。

(11) ?良心的な人柄。?良心的な投票。?良心的な証言。

母語話者であれば、「長々(と)」がマイナス評価を含むことや、「良心的」が日常生活では主にサービス業に関係することがらに用いられることは、例を見れば直感的にわかる。しかし、非母語話者は例を見ても直感的にはわからないので、語の意味、特に日常生活で用いられる際の意味はできるだけ具体的に記述しておく必要がある。

一見文体的な変異形のように見えるものでも、実際は意味が異なることが少なくない。たとえば、「おなじみ」は「『なじみ』を丁寧ないう語」(『辞林第三版』)と説明されることが多いが、実際は「なじみ:個人的に慣れ親しんでいる」、「おなじみ:人々に広く知られている」というようになかなか意味が異なる。それにともない、使用可能な文型も異なる。

(12) テレビや雑誌でおなじみの店(=人々に広く知られている店)

(13) なじみの店(=個人的に慣れ親しんでいる店)

(14) a. なじみ(×おなじみ)がある。

b. なじみ(×おなじみ)が深い(薄い)。

表現の使い方も明示的に記述しておく必要がある。たとえば、「とんでもない」「違う」は、いずれも相手や他人の考えを強く否定する表現として用いることができる。

(15) とんでもない

②相手や他人の考えなどを強く否定するという語。全くそうではない。めっそもない。「お礼だなんて、とんでもない」「今さらいやだなんてとんでもない」「とんでもない、私などにはできません」

(16) 違う

(略) 半ば感動詞的に、相手の意見などを強く否定するのにも使う。「そうではない」の意。「いや、それは違うよ」「違う、違う、こうだよ」

((15)(16)は『明鏡国語辞典』)

しかし、「とんでもない」は謙遜・遠慮の気持ちを表す応答表現になりうるが、「違う」「そうではない」はそのような意味では使えない。

(17) 「今度ぜひお礼をさせてください。」

「いえ、そんな、とんでもないです (×違います)。」

母語話者であれば、「お礼だなんて、とんでもない」「とんでもない、私などにはできません」という例文を見れば、これらが謙遜や遠慮の気持ちの表現になりうること、また文脈によっては、

(18) あんなやつにお礼だなんて、(まったくもって) とんでもない!

(19) とんでもない! そんなこと、私などには絶対にできません。

のように強い拒絶の表現にもなりうることは直感的にわかる。しかし、非母語話者は、(15)の説明および例文だけ見てもそのようなことはわからない。非母語話者向けの辞書においては、表現がどのような意味で使われうるかということ、そのことが明確にわかる例文とともに過不足なく記述することが重要である。

使用者や言及対象の偏り、文体的な偏りも具体的に記述しておく必要がある。「かわいい」のように、使用者や言及対象によって言わんとすることが変わる場合も、そのことを書いておいたほうがよい。

(20) a. (大人の男性が子どものことを) この子、かわいいねえ。

b. (大人の女性が大人の男性のことを) 男って、かわいいわよね。

表現の使用にともなうニュアンスも、コミュニケーション上重要な情報であり、明示的に記述することが必要である。たとえば、「話がある」を単独で用いると、「相手に言いたいこと(特に相談事)がある」という意味になる。通常は「ちょっと話があるんだけど、～」、「ちょっと話があるので、～」のように言い切らない形で用いられ、「ちょっと話がある(あります)」と言い切ると、相手に戦いを挑むような強い調子の発話になる。「ちょっと話があるんですけど、～」、「ちょっと話があるので、～」のような言い切らない形も目上の人物には使いにくい。このようなことは、「話がある」を単位として記述すべきことがらである。

母語話者にとっては暗黙の前提になっていることも、非母語話者には明示的に説明する必要がある。たとえば、「年甲斐もない」の意味は「年齢に似合わず無分別である。いい年をして思慮分

別がない」(『大辞林第三版』)と説明される。しかし、この説明がわかるためには、「思慮分別のある年齢」が何歳ぐらいか、またどのような行為が「年齢に似合わない」かがわからなければならない。日本語の母語話者は、これらの点について一定のイメージを持っているが、非母語話者が同じようなイメージを持っているとは限らない。非母語話者向けの辞書においては、表現の意味だけではなく、表現の意味解釈を支えている暗黙の前提も記述する必要がある。

言語表現にはそれぞれさまざまな「個性」がある。表現の意味や使い方についても、さまざまなことがらを記述する必要がある。「語」の基本形(代表形)を見出しとして立て、それに各種情報を付与するという形は、言語表現が持つ「個性」を過不足なく記述するには窮屈なことが多い。その点からしても、辞書記述においては、意味や使い方を独立に記述する価値のあるまとまり(意味・使用上のまとまり)を記述の単位とするのがよい。

5. どう記述するか

最後に、表現の意味や使い方をどう記述するかという点について述べる。

前節で述べたように、言語表現にはそれぞれさまざまな「個性」があり、表現の意味や使い方については、さまざまなことがらを記述する必要がある。それをどのように整理し、どのように記述すれば非母語話者にとってわかりやすい説明になるかということは、「よく分かる日本語辞書」について考える上で最も重要なことである。平易な日本語を用いることはもちろんだが、それ以外にも考えるべきことは数多くある。現時点ではまだ検討中の部分が多いが、以下ではポイントとなりそうな点を三つあげる。

第一に、「文の意味を大まかに理解する」ために必要な情報と「文を産出したり、文の意味やニュアンスを詳しく理解したりする」ために必要な情報を区別して記述するということがある。外国語を適切に話したり書いたりする、あるいは相手の意図や気持ちを正確に理解するためには、言語表現が持つさまざまな「個性」を、ポイントをおさえた形で知っていることが必要である。そうでないと円滑なコミュニケーションができず、場合によっては誤解やトラブルの元にもなる。しかし、外国語を読む際には、個々の表現の意味はとりあえず大まかにわかればよいことも多い。必要以上に詳しい説明は、読む負担を増やすことになり、非効率的である。情報のレベルを適切に分けることは、日本語の表現を理解・産出するための道具としての辞書を考える上で重要なことである。

第二に、意味から使い方を予測させるのではなく、表現の使い方を目に見える形で記述するということがある。これは、非母語話者にとって抽象的な(具体的な使い方を予測することが難しい)説明をする場合は、必ず具体的な使い方に関する情報を書くということである。

たとえば、敬称の「～さん」「～さま(様)」について、国語辞典には次のように書いてある。

(21) さん [接尾]

① 《人を表す語や団体名などに付いて》軽い尊敬や親しみの気持ちを表す。

「高橋一・妹一・お客一・大工一」【表現】幼児語では動物名などに付けて親しみを表す。「ぞう一」

(22) さま【様】

一 [接尾]

- ①《人を表す語や団体名などに付いて》尊敬を表す。「山田―・あなた―・お客―・社長―・協同組合御―行―」

((20)(21)は『明鏡国語辞典』)

「さん」「さま」が「軽い尊敬や親しみの気持ち」「尊敬を表す」というのは、日本語母語話者には直感的に理解できる説明である。しかし、この説明が日本語の非母語話者にとってわかりやすいとは限らない。実際、「さん」「さま」は、目上の人物の典型ともいえる先生や上司には使えないが、「軽い尊敬や親しみの気持ち」「尊敬を表す」という説明からそのことを予測するのは、非母語話者には難しい。それよりは『さん』『さま』は誰に使えて誰に使えないか(例：先生や上司に対しては「さん」も「さま」も使えない)ということが書いてあるほうが非母語話者にとっては有益である。

第三に、意味の説明が「クイズ」にならないようにするということがある。たとえば、国語辞典の「りんご」の記述は次のようになっている。

- (23) りんご【林檎】[名] 多く紅色・黄緑色の甘酸っぱい果実を食用とするバラ科の落葉高木。また、その果実。生食のほかジャム・ジュース・酢・酒などの原料にする。紅玉・陸奥(むつ)・ふじ・つがる・玉林・ゴールデンデリシャス・スターキングデリシャスなど、栽培品種が多い。四、五月ごろ、枝頂に白または淡紅色の五弁花をつける。

(『明鏡国語辞典』)

百科事典的な説明は、「りんご」の指示対象を知っている人が「りんご」について詳しく知りたい場合には有益である。しかし、「りんご」の指示対象を知らない人が、この説明から「りんご」という語の指示対象を推測することは、クイズに答えるのと同じである。りんごそのものは知っているが「りんご」という語は知らないという非母語話者にとっては、画像を見せたり対応する母語の表現を示したりするほうが負担が少ない。また、りんごそのものを知らない非母語話者にとっては、実際に目にするりんご(の実)の外見と「りんご=よく食べられる果物の一種」ということがわかればとりあえずは十分かもしれない。

百科事典的な説明というものはある意味で極端なケースであるが、日本語について日本語で説明する場合は、これに類することが起きないように常に注意を払う必要がある。

言語表現が持つ「個性」をどのように整理し、どのように記述すれば非母語話者にとってわかりやすいかということについては、まだまだ考えなければならない点が多い。ただ、その際のヒントとなるのは、「教育現場において、あるいは日常生活の中で、辞書を使わずにどのようにして言語表現の意味や使い方を説明しているか」ということだと思われる。

「『…』って何？」と聞かれた場合、われわれは実物を見せたり、「どこそこにあるあれ」のような相手の知識を利用した説明をしたりすることがよくある。また、ある表現の意味を聞かれたときに、「この場合あまりくわしく説明してもしかたがない」、あるいは「文脈がわからないと答

えられない」などのように感ずることも多い。このような感覚を「辞書」という形態にどのように反映させるかは、「よく分かる日本語辞書」について考える上で重要なポイントの一つになると思われる。